
優しい岬

バロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい岬

【Nコード】

N9867H

【作者名】

バロック

【あらすじ】

暮れ時の岬に、一人の女が現れる。全てを捨ててしまった様に泣き崩れる彼女を見て、僕は……

広く美しい空が、オレンジ色に染まる頃、岬に一人の女が現れた。彼女は、ふらりふらりとおぼつかない足取りで、岬の先端部、つまりは崖っぷちまで行くと、立ち止まる。

そうして、しばらく凍りついたように動かなくなった後、唐突に泣き崩れた。粗い地面に膝を着いて、しくしく、ひくひく、泣き始めた。

荒れ狂う波のせいで、彼女が何に嘆き、悲しんでいるのかは分からない。分からないけど、あの様子から察するに、ただ事ではないのだろう。

だから彼女は、この岬に来た。

昔から、自殺の名所として有名だったこの岬に、自殺しに来た。氷よりもずっと冷たい海に、その身を投げるつもりなのだろう。

——そうはさせない。

僕は急いで物陰から飛び出し、叫んだ。

「待ってください！」

しかし、波が岩にぶつかる音は、もっと大きくて、僕の声はそれにかき消されてしまう。

女はおもむろに立ち上がり、崖を、海を見詰める。

このままでは——まずい！

走った。とにかく走った。不安定な岩場を転がるように走った。

「待ってください！」

いきなり腕を捕まれた女は、一瞬、身体をビクンとさせてから、振り向いた。

涙で化粧の流れ落ちた、ありのままの彼女の姿が、そこにはあった。

「あなたは……誰？ 何で私を止めるの？」

今にも消え入りそうな、そういう声だった。

「僕は……」

僕は……

「僕はさっきまで、貴方と同じ気持ちだった者です。でも、見ての通り僕は死んでません。死ねなかったんです。飛ぶ直前に考えちゃいました。両親が悲しむ様子を、泣いている姿を。そしたら——死ねませんでした」

僕は涙をボロボロ零して、呟いた。

「あなたには——あんな思いさせたくない」

女は僕に抱きついてきた。ごめんなさいごめんなさいと何度も謝ってきた。

「いいんですよ」

そう言って、僕は彼女を抱きしめた。

*

それから僕達は、海を見詰めて色んな話を話した。

生きる事。死ぬ事。家族の事。他愛もない話を交し合った。

気がつけば、彼女は笑っていた。

着飾っていない、純粋な笑顔で笑っていた。

僕も笑顔だった。

すっかり世界が闇に染まった頃、女は「ありがとう」と言って何処かへ消えてしまった。

結局、最後まで名前を知ることがなかった女に、僕は手を振った。

「さようなら——そして、お疲れ様、僕」

ただの闇に変わり果ててしまった岬を背に、僕は思う。

……やっぱり、演技の練習にはもってこいだな、この岬は。

泣いて笑える実力俳優。

いつか自分が、そう評価されるのを夢見ながら、僕は岬を後にした。

（後書き）

人の生死を描く話は、何処までが許されるのか分かりにくいので、大変です。とりあえず、これは規定範囲内だろう。と、勝手に解釈している自分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9867h/>

優しい岬

2010年10月11日01時10分発行